

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23530866

研究課題名(和文) 保護者にとっての子ども入園の意味―「親としての発達」の視点から

研究課題名(英文) Influence of children's kindergarten / nursery life on their parents - From the viewpoint of "the development as parents"

研究代表者

藤崎 春代 (FUJISAKI, HARUYO)

昭和女子大学・生活機構研究科・教授

研究者番号：00199308

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：子どもの園生活開始に伴う保護者の気づきや変化について、入園前から卒園までにわたる継続的質問紙調査により検討した。結果、保護者の園選択理由は、実際に園を選択する過程で選択前よりも具体的なものとなり、また、保育園か幼稚園かという入園先によっても異なるものとなった。入園直後は、子どもの戸惑う様子に心配をした保護者も、入園後しばらくすると、子育てを振り返る余裕ができ、自身の成長を感じるようになった。

研究成果の概要(英文)：I researched the development of parents through the influence of their children's kindergarten or nursery life. Parents answered questionnaires from the start of their children's kindergarten or nursery life to the end. Results indicated the following: (1) Parents thought their children's kindergarten or nursery life, but they selected their children's kindergarten or nursery according to concrete reasons, (2) Selecting reasons differed from kindergarten children's parents and nursery children's, and (3) Parents assessed not only their children's growth through kindergarten or nursery life but also their own growth.

研究分野：社会科学

キーワード：入園 乳幼児 保護者 親としての発達 発達相談 スーパービジョン

1. 研究開始当初の背景

多くの幼児が、一日の中のもっとも活動的な時間帯を保育所や幼稚園(両者をまとめて、以下では園と呼ぶ)で過ごしている。しかしながら、園で生活するという事はそう簡単なことではなく、泣きながら登園したり、さらには登園を拒否したりすることは、決して珍しいことではない。保護者は、こうした子どもの様子に戸惑い、育児不安が助長されることもある。従来、心理学領域では、こうした子どもの園へのなじめなさに対して、母子分離不安と関連づけて検討することが中心であった。母親という強力な安全基地から離れることへの不安が、泣きながらの登園や登園拒否を引き起こすという仮説である。それに対して、研究代表者である藤崎(2007, 2008, 2009a, 2010)は、入園を「生涯発達の中で幾度となく繰り返される人生移行の最初の経験」(山本・Wapner 1992)と位置づけ、「幼児が家庭生活とは異なる園生活の活動の成り立ちを理解する」必要に迫られるライフイベントであると考えて、幼児の入園後の様子を園生活理解の視点から検討してきた。その結果、泣いたり、不安な様子を示したりする子どもも含めて、子どもたちは園生活を自分なりに理解しようとし、また、保育者や保護者はそれを援助していることが明らかとなった。

一方、分離不安については、近年、保護者、特に母親の側に注目した検討がなされ始めている。保育所に子どもを預けることを母子分離状況として検討した柏木・蓮香(2000)は、乳幼児の保護者が、子どもを預けることが母子双方にとって積極的意味を持つことととらえつつも、罪悪感や懸念の強い母親もいることを示唆している。これに対して、藤崎(2009b)は、入園直後に保護者が家庭でとらえた子どもの様子を分析する中で、保護者は、子どもの園生活適応を援助しているとともに、保護者自身が子どもの様子を通して、園生活に巻き込まれており、分離不安を感じている保護者もいることを示唆した。また、藤崎は、長年にわたって自治体の発達相談事業に協力してきているが、1歳6カ月健診や3歳児健診では問題が指摘されないものの、園生活開始に伴って子どもの発達状況に心配なことが出てきた事例を数多く担当し、実践研究を重ねてきた(藤崎 2009, 藤崎・木原 2010)。こうした事例の相談過程の中で、園生活開始や園生活適応についての保護者の不安の大きさ、保育者との連携の糸口を見出すことの困難さに出会ってきた。

こうした研究成果を背景とすると、「入園とは、保護者にとっても、子どもを家庭外の生活へと送り出す移行体験である」との立場から、保護者に焦点を当て、子どもの入園が保護者にとってどのような意味を持つのかを検討することの重要性が確認できる。

藤崎春代 2007 5歳児クラス後半における幼児の園生活適応と就学準備 日本発達心理学第18回大会発表論文集 762.

藤崎春代 2008 幼稚園3歳児クラス新入園児の園生活への移行過程 保護者の日誌記録の分析から 日本発達心理学第19回大会発表論文集 241.

藤崎春代 2009a 幼稚園3歳クラス新入園児の園生活への適応過程 - 入園後3ヶ月間の家庭での様子からの検討 日本発達心理学第20回大会論文集, 419.

藤崎春代 2009b 子どもの園生活と保護者の発達、発達 118 ミネルヴァ書房 pp.58-64.

藤崎春代 2010 幼稚園3歳児クラス入園児の園生活への適応過程と保護者の援助 日本発達心理学第21回大会論文集, 382.

藤崎春代・木原久美子 2010 「気になる」子どもの保育 ミネルヴァ書房

柏木恵子・蓮香園 2000 母子分離<保育園に子どもを預ける>についての母親の感情・認知 分離経験および職業との有無との関連で 家族心理学研究, 14, 1, 61-74.

山本多喜司・Wapner(編) 1992 人生移行の発達心理学 北大路書房

2. 研究の目的

保護者は、子どもの入園を契機として、園生活に関連した子どもの成長を実感する機会も数多くある一方で、子どもの言動から不安や戸惑いを感じることも多いと思われる。そして、成長の実感のみでなく不安や戸惑いなどの経験を通して、「親としての発達」が促されるのであろう。そこで、子どもの園生活開始や園生活適応に果たす保護者の役割を検討するとともに、子どもの園生活を通して保護者としてどのような気づきや育ちが促されるのかを検討した。本研究の成果は、園に通う子どもを持つ保護者に対する子育て支援についての基礎的知見となる。

本研究は、2つの研究方法によって行った。第1は、保育所や幼稚園に入園する子どもの保護者を対象とした、入園前から卒園までの縦断的質問紙調査である。調査項目は、調査時期に応じて、入園の時期や園選択についての考え方、入園に向けての準備、入園後に家庭で保護者に把握される子どもの様子とそれを受けての保護者の反応、就学に向けての準備、などと変化させた。第2は、発達相談の場における実践研究である。臨床例を検討するとともに、発達相談のシステム整備にも取り組んだ。これらの資料を基に、以下の3点について検討した。

(1) 小学校入学と比して、園の選択範囲は広い。保育所か幼稚園かという大きな選択の他にも、どのような保育目標を掲げ、どのような保育形態をとり、どのような保育活動を重視するのかにより、園の特徴は多様である。こうした多様性の中での園選択には、保護者の子ども観や保育観(広義的教育観を含む)・子育て観が反映されているであろう。そこで、園選択基準や園選択行動に着目した。

(2) 入園までに形成された保育観・子育て観は、入園後も折に触れて修正がなされるものと

思われる。修正の契機の1つは、目の前の子どものみせる様子であろう。そこで、子どもが、家庭において、園生活にかかわってどのような様子を見せるのか、園生活についてどのように語るのかについての資料を得て整理するとともに、こうした様子を受けた保護者の対応を縦断的に捉えた。

(3)子どもの様子を受けて、保護者は園に対してさまざまな働きかけを行い、同時に、園からもさまざまな働きかけがなされる。さらに、他専門家(本研究では特に心理の専門家に注目する)への相談へと展開することもある。家庭と園との連携のありかた、連携における心理の専門家の果たす役割について検討した。

3. 研究の方法

子育て広場で協力を募る保護者に対する縦断的質問紙調査と、所属大学が運営するNPOが自治体に協力して実施する発達相談の場での臨床実践研究、という2種類の研究を実施した。

(1)縦断的質問紙調査

入園前の園選択時期から開始し、卒園までの各年度に3回(入園年度あるいは2回(進級年度)郵送配布・回収にて行った。

対象：研究開始時の子どもの年齢は0歳から2歳とし、子育て広場にて500名程度の保護者に対して調査依頼書を配布した。幼稚園入園をひかえていると思われる2歳児のみではなく0・1歳児も対象とするのは、保育所入園予定者あるいは就園前保育利用予定者を含めて検討したいためである。

研究期間：0・1歳児から開始することを踏まえ、調査期間は23年度から27年度までの5年間とした。ただし、最終予定年度において卒園していない対象児がいたため、1年間の研究延長を願い出て受理された。

調査時期と調査内容：

継続調査対象者選定調査；23年9月に調査依頼書(目的と方法、プライバシー保護と権利擁護の方針を記載)と継続調査協力同意書、および1回目質問紙調査用紙とを配布した。継続調査の同意が得られた対象者についてのみ、以後の調査を行った。24年2月に2回目調査を行い、翌年度入園予定があるかどうかの確認をした。翌年度の入園が決まった対象者については、該当園を選んだ理由、入園先決定までの経過、入園に向けての取組みの様子、園生活への保護者の期待と不安などをたずねた。入園予定なしと答えた対象者については、その理由や利用予定の子育て資源をたずねた。入園予定なしと答えた対象者については、入園決定まで、毎年度9月と2月に家庭生活の様子や子育て資源利用についてたずねた。

園生活調査；入園年度には4月・7月および2月に調査を実施し、進級年度には7月および2月のみ実施した。4月調査では、入園前に取り組んだ準備、基本的生活習慣の獲得状況、入園式に参列しての子どもの様子と保

護者の感想、入園直後の子どもの様子と保護者の感想や対応などを中心とした。7月調査では、7月時点での基本的生活習慣の獲得状況とそれへの保護者の配慮、子どもが園生活を家庭で再現したり話したりしている様子、前回調査以降7月までに子どもにみられた戸惑いとそれへの保護者の対処、子どもの成長を感じる点などを中心とした。2月調査では、2月時点での基本的生活習慣の獲得状況とそれへの保護者の配慮、子どもが園生活を家庭で再現したり話したりしている様子、前回調査以降に子どもにみられた戸惑いとそれへの保護者の対処、子どもの成長を感じる点、進級への子どもと保護者の期待と不安(5歳児では就学への期待と不安、および就学への準備状況)などを中心とした。

質問紙調査用紙の配布と回収：継続調査対象者選定調査のみ所属大学が運営するNPOの子育て広場で配布したが、その回収、およびそれ以降の調査用紙の配布と回収はすべて対象者に郵送で行った。

結果の概要の送付：対象者の利益保護を図るため、調査実施ごとに、結果の概要をまとめた文書を作成して、調査対象者に郵送した。

(2)発達相談実践研究

年度に限定せず、以下の3点の内容を実施した。自治体に協力して所属大学のNPOにて実施する発達相談事例のうち、園生活開始および園生活適応に絡んだ事例についての事例検討。医療・福祉・教育・保育等関係諸機関との連携もはかりつつ、よりよい支援システム構築について検討。該当児や保護者の支援を行う際の留意点や相談システム向上について検討。

4. 研究成果

目的と対応して、以下のような結果が得られた。

(1)保護者の園選択理由

保護者の入園先選択理由をとらえるため、入園先選択理由尺度を作成した。入園先には、幼稚園と保育園、および子ども園があるが、まず、入園先を問わずに尺度作成を行った。尺度は、4因子で構成された。遊び重視・保育者信頼 はのびのびとした遊びに関する項目と保育者と保護者の良好な関係に関する項目が合体した因子、教育 はしつけや知的活動に関する項目からなる因子、友だちは子どもの友だち関係に関する項目からなる因子、委託 は保育時間の長さや給食があることなどに関する項目からなる因子である。

次に、入園先を選択する前と後とで選択理由に差があるかどうかを検討するため、選択前調査(継続調査対象者選定調査時)と入園直前調査とを比較した。保育園・幼稚園別に、各因子得点が選択前と選択後で差があるかどうかを検討するために、対応のあるt検定を行った結果、両園ともすべての因子において、選択前よりも選択後の得点が有意に低

かった。次に、保育園と幼稚園の差の有無を検討するため、因子別および選択前・選択後別に対応のないt検定を行った。結果、選択前・選択後ともに、遊び重視・保育者信頼因子は園間に差がなく、委託因子は保育園のほうが幼稚園よりも高い、という2点では変化はなかったが、教育因子と友だち因子では、選択前は差がなかったが、選択後は幼稚園のほうが有意に高かった。入園先として保育園か幼稚園かは決まっているものの具体的な園選択を行っていない段階では、保育園特有の「委託」因子得点に差がみられるものの、その他においては重視の程度は差が無く、実際の園選択の過程で「教育」や「友だち」において差が出てくることがわかる。

園選択の過程で、選択理由に変化がみられたことから、改めて、幼稚園および保育園という入園先別の尺度を作成した。結果、入園先選択理由尺度保育園版は のびのび保育 保育者との連携 教育・しつけ 友だちの4因子で構成され、幼稚園版は のびのび保育 教育・しつけ 周辺特徴 委託 保育者への親しみの5因子で構成された。両尺度において、のびのび保育 教育・しつけ という保育内容に関する因子は園間でほぼ共通する内容であった。一方で、保育者にかかわる因子は、「親しみやすい」といった両園で共通する項目もあるものの、幼稚園では「明るい」が重視された 保育者への親しみ 因子となり、保育園では保護者や子どもの特徴との適合が重視された結果 保育者との連携 となった。また、保育園では<友だち>因子が抽出されたが、幼稚園では保育内容以外の園の特徴(園児数の多さや、男性の先生の存在など)や委託にかかわる内容が因子を構成するなど、異なる特徴も見られた。入園先により選択理由の構造が異なることが示唆された。

(2)子どもの様子と保護者の変化

入園後の子どもの戸惑いや成長をどのように捉えるのかと関連させつつ、7月時点での保護者にとっての子どもの入園の意味づけを検討するため、入園後の子どもの戸惑いの様子、7月時点での子どもの成長の様子、7月時点で保護者が感じている自身の変化、の3調査項目を分析対象とした。・の回答についてKJ法に基づいてカテゴリ分けを行った結果、幼稚園保護者に比べて保育園保護者の方が、子どもの戸惑いを記述する割合が高かった。戸惑いの内容は、泣きなどの[母子分離]と[他児とのかかわり]については同程度であるが、[病気]は保育園保護者に多かった。こうした戸惑いがありつつも、7月にはすべての保護者が子どもの成長を感じていた。両保護者は、ほぼ共通する内容をあげていた。保護者の成長の記述では、両者に共通して[子育てのふりかえり]と[子どもを叱ることが減る]が回答されていた。[子どもを叱ることが減る]という記述には

必ず「イライラが減り」と理由づけられていた。保育園保護者では、一緒に過ごす時間が少なくなることや子どもの戸惑いの様子を踏まえて、一層[子どもとかかわる時間を大切に]するようになっていた。幼稚園保護者は[子の成長を感じ嬉しい]というような子どもに関する記述の他、[時間に余裕ができてホッとした][ママ友ができた]と記述する人もいた。これらの結果から、保護者にとっての子ども入園の意味は、入園先によって異なることが推察できた。特に、幼稚園入園児の保護者にとっては、子どもの入園は、子育ての負担を軽減し、家庭外の人々とのネットワークを開く契機となることが示唆された。

(3)心理の専門家の果たす役割と専門性向上

自治体に協力して所属大学のNPOにて実施する発達相談事業は、いわゆる療育事業ではない。相談事例を分析した結果からは、専門機関での相談には躊躇がある「保護者の気づき」や「ちょっとした不安」を、必要であれば地域の支援事業の枠組みにつなぐ役割を果たしていた。相談担当者には、気づきや不安に対応するわずかな発達上の弱さをアセスメントする専門性が期待されるといえよう。こうした専門性向上には、研究を受けたりすることが不可欠だが、個々の事例についてのスーパービジョンが欠かせない。文献検討からは、スーパービジョンの専門性向上も重要であること、スーパービジョンの専門性向上の道筋が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

藤崎春代、臨床発達心理士の専門性向上におけるスーパービジョン - よりよいスーパービジョンを実施するための基礎的文献検討 - 臨床発達心理実践研究、査読有、11巻、2016、55 - 62 .

百瀬 良・越智真理子・佐藤昌子・松永しのぶ・藤崎春代、地域の発達障害児支援事業における発達相談室の役割 - 個別発達相談およびペアレント・トレーニングの検討 - 、昭和女子大学生生活心理研究所紀要、査読有、16巻、2014、81 - 93 .

藤崎春代、子どもが家庭に持ち込む園生活親に与える影響、昭和女子大学生生活心理研究所紀要、査読有、15巻、2013、33 - 44 .

[学会発表](計 4件)

藤崎春代、保護者にとっての子ども入園の意味(4) - 入園3か月後の母親の意味づけ - 、日本発達心理学会第28回大会、2017年3月25日、広島大学(広島県広島市) .

藤崎春代、"保護者にとっての子どもの入園の意味(3) - 入園先決定理由の変化"、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日、東京大学(東京都文京区)。

藤崎春代、保護者にとっての子どもの入園の意味(2) - 保育所・幼稚園別の入園先選択理由の検討 -、日本発達心理学会第25回大会、2014年3月22日、京都大学(京都府左京区)

藤崎春代、保護者にとっての子どもの入園の意味(1)、日本発達心理学会第24回大会、2013年3月15日、明治学院大学(東京都港区)。

〔図書〕(計 2件)

藤崎春代、(新保育士養成講座編纂委員会編 [改訂2版]新保育士養成講座第6巻保育の心理学)、全国社会福祉協議会、基本的生活習慣の獲得と発達援助、2015、全229ページ中6ページ、198 - 203。

藤崎春代、(新保育士養成講座編纂委員会編 新保育士養成講座第6巻保育の心理学)、全国社会福祉協議会、基本的生活習慣の獲得と発達援助、自己の主体性の形成と発達援助、発達の課題に応じた援助や関わり、2011、全224ページ中13ページ、198 - 210。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤崎 春代 (FUJISAKI HARUYO)
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号： 00199308

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者

松永 しのぶ (MATSUNAGA SHINOBU)
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号： 50300033

(4) 研究協力者

木村 あやの (KIMURA AYANO)
佐藤 昌子 (SATO AKIKO)